

あわせ鏡の向こう側へ

mabA sllA

主筆室科実得字野

総合科学部

米田

巖

見限る涯なき彼方の蒼空を、真紅に染めあげてゆく落日が、遙か、かなた、真一文字に長い影をひき、暮れなずむ砂漠の地平に沈むころ、天蓋に宝石箱をひっくり返したように、燦然ときらめく星座に溶けていく。コート・ダジュールをおもわせるコバルト・ブルー、群青、ウルトラマリン！ いや、それは、もう、高貴な紫色、日本の古代色のはなだ色に限りなく近い。凜として犯しがたいほどの透明な一瞬を眼前にして、私は、日中の灼熱のほとぼりがまださめやらぬラジャスタン、タール砂漠の熱砂に立ちつくしていた。

1980年から1990年の10年の間、渡印5回、通算して、1年近くインド亜大陸を徘徊したことになる。中華人民共和国について、世界第2位の人口規模を誇るインドの地を踏みしめたとはいえ、ユーラシア大陸南端の一隅に過ぎない。私は、いったい何を見てきたのであろうか。328.8万km²、日本の約9倍の面積に、7億6,6135,000人も人間のひしめきあうインドは、われわれ日本人の常識をはるかにこえる異邦の地といわねばなるまい。

アメリカ合衆国の紙幣の、“In God We Trust” という文字に、この国の建国の始祖となったピリグリム・ファザーズのプロテスタンティズムの精神を見いだすのはいとたやすい。しかし、インドに入国した外国人ならば、インド連邦準備銀行の発行する法定紙

幣に、13にもほる地域言語で、いちいち、額面が表記されているという事実を発見して、たちまち狼狽してしまうであろう。2つの文字、3つの宗教、4つの言語、5つの民族、6つの共和国と、2つの自治州からなっている、といわれるユーゴスラビア共和国をはるかにしのぐ複雑なお国柄が、ここに表われている。

旧藩王国、イギリス、フランス、ポルトガルなど旧宗主国が支配していた地域を、言語、宗教、民族などを指標にして国家行政領域を再編成し、1947年に独立、1950年には現在のバングラデッシュを含むインド共和国がイギリス・コモン・ウェルスの一員として再生した。その結果、行政領域は、現在、22の州 (state) と連邦政府直轄領 (union territory) 10に整理統合され、この下に、県 (district)、郡 (tashil)、市町村 (city, town, village) が階層的に組織されている。県知事と郡の首長は、I.A.S (Indian Administrative Service, 旧高等文官試験合格者、国家公務員上級甲種に相当)、および、これに準ずる競争試験 (都道府県職員上級試験、行政職に相当) で選抜されたエリート官僚が地方自治の中枢を掌握している。地方行政組織のなかでも村は、国家財政の歳入の必要を充たす税務行政の点から、現在でも徴税村 (revenue village) として位置づけられ、イギリスによる植民地支配の影響を色濃く残しているが、村長

や、村議会は、独立後の地方行政改革により民選となっている。

この点から見ても、《民族の博物館》といわれるインドがなぜ連邦共和国制を導入しなければならなかったかが推測できる。フランスのブルターニュや、カナダにおけるケベック、あるいは、イングランド、ウエールズ、スコットランド、北アイルランドの分邦的な諸王制国家の連合、連立国家‘United Kingdom’——イギリスの比ではない。国のなかの国ではなく、一国のなかの諸国を統合するアマルガムは、英国の遺制といわれる、非能率極まりない red-tapism の典型などと誹謗されながらも、イギリス統治下で立法、司法、行政にわたる強大な統治機構として確立した官僚組織や、鉄道、港湾、灌漑施設などの地域間エネルギー・フローを統合するシステムなどよりも、英語のはたしてきた役割がはるかに強いといわねばならない。

文化的アマルガムのほうが歴史的慣性を有しているだけに、その影響力も大である。ヒンディー語 (82.63%)、ムスリム系のウルドゥー語 (11.36%) が主要言語とはいえ、このほかに今なお、11にものぼる地域言語が併用され、さらに地域的にみれば、community/tribal ごとに多様な language が数多く用いられている。キリスト教徒が1,620万、2.43%、シーク教徒が、1,310万人、1.96%、仏教徒は、全人口の0.7%をしめるにすぎないが、470万人、さらに、ジャイナ教徒も320万、0.48%にものぼる。かかる多言語主義が厳然としてあればなおさらであろう。しかし、その間に相互浸透はない。なぜなら、ことばの意味を‘convey’するだけでは、心性を語り尽くせないからである。公用語としての英語と、法定紙幣に印刷された13の地域言語は、長い間ロンドンの金市場とリンクした金

為替本位制度により、辛うじてその命脈を保ち続けたインドルピーとともに、皮肉にも英国の植民地主義が生んだ鬼子とでもいうべきものであろう。労働の結晶たる貨幣も、ことばも、地域という法服を着て流通するしかない。

元禄年間、時の幕閣、柳沢吉保は、赤穂藩主、浅野内匠頭が、吉良に、京よりの勅使応接役を仰せつかったはよいが、ご高家筆頭の権勢をふりまわして、いささかも逡巡の色みせぬ吉良上野介に怨みつもって、江戸城、松の廊下にて刀傷に及んだ仕儀、不届き千般、天下のご政道を乱すものとして、即刻、切腹を命じたうえ、お家断絶を厳命した。ここで、城池明渡しもさることながら、それに先立って、藩札を回収せしめたことを忘れてはならない。幕府が同藩に貨幣鑄造権を付与し、それに基づいて、強制通用力を与えられて、藩内外に流通していた紙幣を額面どおりの量目の金、銀に強制換価させるといふかたちで回収してから、城を明け渡しをせまる、という幕府方の沙汰は、浅野藩という一小国の消滅を端的に象徴して興味深い。各藩とも、ものいりで、支払準備高をはるかに越える膨大な藩札を発行し、それらが藩内はもとより、藩外にも流通していたのが通例である。金銀複本位制に基づく兌換制度が円滑に機能し、そして藩札を強制的に兌換せしめる権力機構が存在するかぎり、浅野藩を経済的に締めつけて、窮地に追い込み、実質的に取り潰したうえで、軍事力で明け渡しを強行する。幕藩体制を護持していくためには、減封、削封、移封などの処分ではなく、公秩序を紊乱したものはあくまで、封殺し、完膚なきまでに殲滅してしまう、という幕府の強腰の政策は、それなりに首尾一貫していた。いわば、カルタコの平和、という逆説を地で行っている。お家再興はおろか、あまつ

さえ、通貨は藩経済の動脈をつかさどる血液である。これを止められての延命嘆願は無益というものであろう。インド・ルビーの生命線は金為替本位制度により、ロンドンのロンバート街にある金融市場に緊密に織り込まれていた。国のなかの諸国は、制限された主権を主張しつつ、辛うじてその命脈を保ってきた。浅野藩の場合でも、誰が国替えてこようと、旧浅野藩民の生活文化、とりわけ、言葉の文化は変わるものではない。

インドの大地に根づいた地域固有の伝統文化が存続するかぎり、人々の唇から、土地の土俗的な言語が失せ去ることはあるまい。貨幣とことばは、地域のひとびとの間を行きかい、くらしを潤す動脈流である。最後の決済手段が、金であるように、土着的な、community/tribal のことばこそ、地域のなかで育まれてきた心性をわかち持つ最終的よりどころとなる。フランス人以上に金選好が強いのもインドならではである。



どんな僻遠の地にある村でも、必ず、ゴールドスミスがいる。相次ぐ政変や、異民族の流入があればこそ、最も信頼できる金の価値が尊重される。幼児婚がひろく行われ、寡婦の再婚が歓迎されず、肉食がおおむね忌避されるなど、'food taboo' も決して少なくない。寡婦が亡き夫を追って、燃えさかる炎に我が身を投じる'sati' という慣行も全く消失したというわけではない。これらすべて、純潔の保持であり、賢婦二夫にまみえずであり、およそ生きとし生けるものが、生命の連鎖で固く結ばれている、とするいのちに対する畏敬の念の表われと解すべきであろう。転生輪廻の思想も、castism もそこから生まれてくる。上品、中品、下品、それぞれが3等に分かれ、都合、9品となる。九品仏が尊ばれる由縁である。追善供養では遅すぎる。わが日本は、理において、海洋国家イギリス合理主義と経験主義を志向してきたが、その心根において、インド世界に最も近い。インド——貧困なるがゆえに卑小ならず。